

Title	血脇守之助伝
Journal	, (): -394
URL	http://hdl.handle.net/10130/917
Right	

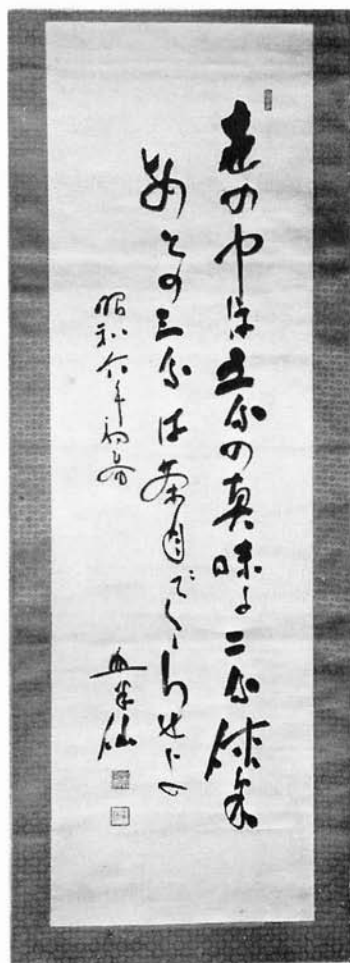
血
協
守
之
助
傳

題字

東京歯科大学 鹿島俊雄理事長



血脇守之助先生



世の中は五分の真味に二分狭気

あとの三分は茶目でくらしせよ

昭和六年初春

血半仙

血脇守之助先生書

序

学校法人東京歯科大学

理事長 鹿 島 俊 雄

この度、血脇守之助先生のご生涯の記録が伝記として刊行されるに至ったことは、まことに喜びに堪えない。私共が師表と仰ぐ先生のご事跡については、従来、口伝に類する形で歯科界、同窓、校友に語り継がれてきたことが多く、それすらも歳月の経過と共に次第に忘れ去られて行くことは否めない事実であった。本学法人理事会は、この点を深く憂慮し、血脇守之助先生が達成された偉業を後世に正しく伝え、かつ貴重な史実、資料の保存をはかるため伝記刊行を決意し、いまを去る九年前、本学創立八十周年事業の一環として伝記編纂委員会を正式に発足させた。この委員会の委員長には、ご承知の通り故関根永滋学長が就任され、困難な事業の推進に努力されたが、業半ばにして不幸病を得て逝去されたため、この事業は松宮誠一学長に継承され、幾多の難関を乗り越えて遂に完成の日を迎えた。本学法人理事会は、ここに改めて鋭意編纂の衝に当られた委員長およびその指導下に尽力された編纂委員ならびに関係者の方々のご努力に深甚なる敬意を表する次第である。本学教職員、同窓、校友、学生諸君におかれては、本書によって明らかにされた血脇守之助先生の建学のご意思を帯し、茲に思いを新たにして、本学の発展、歯学の興隆、歯科界の繁栄に寄与されることを衷心から希求すると共に、時恰も、東京歯科大学千葉校舎起工式を目前に控え、世界に誇る歯学の殿堂の建設こそ血脇守之助先生のご意思継承の表れであることに思いを致し、一層のご協力を要望する次第である。

昭和五十四年二月二十四日

発刊の辞

東京歯科大学血脇守之助伝編纂委員会

委員長 松 宮 誠 一

血脇守之助先生の七十七年の事跡を辿る伝記編纂事業は、昭和四十五年八月十三日正式に発足したが、この約九年間は本学にとって重要な諸事業が併行的に推進された時期であって、大学の機構整備と刷新、千葉校舎の建設計画の促進、第十四回日本歯科医学会総会の主管業務等いずれをみても大学の総力を結集する必要がある重要事項であった。したがって伝記編纂もそれらと競合、重複し、時間的にも、労力的にも余裕に乏しい状況の中で遂行されたため、直接その衝に当る編纂委員の心労は極めて大きいものがあつた。またそのみならず、確実な実録とその時代背景を遡及するには、略伝、小伝を経過して、本格的編纂に移行し、正鶴を期することが必要であると思われたが、現在まで、血脇守之助先生に関する刊行物は皆無の状態であつたため、事象の流れを遡る作業は遅々として進捗しなかつた。しかしながら、これらの悪条件にも拘らず、刊行の日を迎えたことは、関係者一同にとり、睫眉を開く思いであるといつても過言ではない。

今回の伝記編纂は、発足時の委員会において確立された大方針に基づき、血脇守之助先生のご生涯と医育、医政について成就された偉業を再現し、公伝として正しく伝えることを主眼としたが、作業の進行途中において、事実の簡条書きの羅列主義を排し、読み易く、親しみ易い物語り形式で全篇を貫くという方針が追加された。この決定に基づ

いて草稿の執筆は石川達也教授に一任され、学内、学外多数の関係者の支援協力を得て、再調査、再編成の作業が行した。その結果、血脇守之助先生の事跡をより判り易く、意欲的に後世に伝える意図はほぼ達成されたと思われるが、同時に正確さを期する意味において、草稿完成後、改めて歯学の歴史に堪能な高木圭二郎教授、榊原悠紀田郎教授の助言を仰いで再検討し、萬遺漏なきを期した。

このような過程を経て、血脇守之助先生の三十三回忌の御命日の日に刊行の運びとなったことは関係者一同まことに喜びに堪えない。ここに改めて業半ばにして幽明境いを異にされた故関根永滋前委員長のご仏前にその完成を報告すると共に、編纂事業に参加、協力された方々の辛苦に対し深甚なる敬意を表し、併せて、本書が歯学歯科界興隆の糧として活用されることを希望する次第である。

昭和五十四年二月二十四日

血脇守之助先生伝記編纂関係者氏名

本伝記編纂は長期に亘って継続されたため完成時までに委員および関係者の移動が多数にのぼった。したがって、最終完成時の委員および関係者と共に発足当初から完成時までの間の委員の氏名を列記すれば次の通りである。

完成時の委員および関係者

松宮誠一、高木圭三郎、金竹哲也、榊原悠紀田郎、石川達也、町田幸雄、浅井康宏、高橋一祐、成田むつ、磯 泰巳、平井義人、松井恭平、小林晋、半田由美

発足時および中間で就任した委員（完成時の委員として含まれる者は除く）

関根永滋*、松井隆弘、長尾喜景、三崎針郎、近藤 昭、米沢和一*、今西孝博、服部玄門、渡貫 健、田上隆弘、大塚弘介、前田和男、篠田 登、石山照雄、鳥居栄一、對馬具海、薬師寺仁、斥田克巨、斎藤利明、山崎潤之介
同窓会父兄会関係委員

榎本太郎、景山博水、高 達*、渋谷孝麿、島田宗武、武井憲二、長田卓爾、長屋 弘*、津島秀雄、福岡 明、松本 績、藤尾木好*、山口玄洋、山口正人、横矢重包*、吉井 弘*

*印は故人

編集方針

- 一、血脇守之助先生の家系、生いたち、業績を年代を追って記述することを方針とした。
- 二、歯科界における足跡は、事項別に集約した方が理解しやすい場面も少なくないため、そのような場合には年代順記述の原則をそれぞれの集約事項の範囲内にとどめて編集した。
- 三、本伝記編集委員会は、公伝編集を第一の方針としたため、いわゆる外伝に属すると思われる事項は、極力これを省いた。
- 四、血脇守之助先生の人間味豊かな側面を伝えるエピソード、思い出の類を集録することも必要と思われたが、公伝の流れを分散させるという理由から、文集企画の編集方針を採用しなかった。
- 五、記述および年表作製に当っては、できるだけ社会情勢との関連において、血脇守之助先生の事跡を把握するよう努力した。
- 六、史料は、東京歯科大学史料室ないし図書館所蔵のものを主として利用し、一部の史料については、学外から提供を受けた。文献については、参考書籍、雑誌名を一括して記載することにした。
- 七、伝記編集に当って個人名誹謗に属するもの、歯科界融和の立場からして不適当と思われる内容のものは、できる限り排除した。

凡 例

- 一、原則として漢字は新字体を用い、新かなづかいを用いた。
- 一、引用文については、原文のままとしたが漢字は一部新字体を使用した。
- 一、固有名詞については、一部新字体を用いた。
- 一、文中の氏名は敬称を省略したが、血脇守之助先生およびそのご家族については、原則的に名字を用いず、名前で表現した。
- 一、敬語、称号、肩書等の省略が文意を損ねるおそれのある場合には、これを記入して用いた。
- 一、称号および肩書については、調査の及ぶ限りにおいて、その年代毎の称号、肩書を使用した。
- 一、文中年代を記載するとき、明治三年（一八七〇年）のように西暦は（ ）内にいれた。
- 一、年代については、元号を用いて表現したが、年表では元号を西暦と対応させた。
- 一、年齢については数え年で表記した。なお満年齢に換算する必要がある場合に備えて年表に生年月日を付記した。
- 一、法令、規則、規程については、医育、医療制度に関連すると思われるものを、文中および年表中に可及的に挿入した。
- 一、法令、規則、規程の公布、施行の年月日は文中で省略された場合でも年表には記入した。

目次

第一章	ふるさとの記……………	一
	生誕の地(一)	
	加藤家のこと(四)	
	血腸家のこと(二二)	
第二章	梅檀は双葉より芳し……………	一五
	呱呱の声(二五)	
	報恩の教師(二七)	
	名小使島根熊吉(三三)	
	天賦の記憶力(三三)	
	中野家の食客(三五)	
第三章	東都遊学……………	二八
	(險の父(三〇)	
	赤いおべへ(三一)	
	転学また転学(三四)	
	慶応義塾入学(四二)	
第四章	就職戦線……………	四五
	新聞記者として第一歩(四五)	
	英語教師大活躍(四九)	
	ドクトル田原利(五一)	
	曙光(五〇)	
第五章	歯科医への道……………	五九
	助言(五九)	
	高山歯科医学院入学(六一)	
	第一回卒業式と院友会の発足(六五)	
	公事漸く多端(六七)	
第六章	雄飛のとき来たる……………	七二
	野口清作と石塚三郎(七二)	
	一躍病院の経営者(七六)	
	東歯家族主義のいわれ(七〇)	
	ずばり一石の建議(八一)	
第七章	血腸牙大夫清国を行く……………	八三
	白羽の矢(八三)	
	国際情報の前線(八六)	
	天津・北京・上海(八八)	
	帰国要請(九〇)	

第八章	東京歯科医学院誕生……………	一九八
	奥村鶴吉の登用(一九)	借金開校(二〇)
	無から有を生じる(二四)	来賓二百名・生徒十三名(二〇)
		やり繰り算段(二二)
第九章	歯科医政の要……………	一一八
	医師会の動き(二〇)	六百の歯科医大同団結(二〇)
	歯科医師法成立の凱歌(二七)	もたつく東京市歯科医師会の設立(二九)
第十章	専門学校への昇格……………	一三六
	切り売り代価で留学费(三六)	白堊の校舎(三〇)
	東京歯科学講習所開設(四七)	専門学校設置認可(四九)
		学生会の発会と同窓会の転進(五五)
第十一章	苦闘十年の成果……………	一五七
	平塚の仮寓(五七)	苦闘十年(六〇)
	授くべきものは既に授けたりと信ず(六六)	高山紀齋還暦祝賀会(六四)
第十二章	模倣からオリジナルへ……………	一七三
	學術研究の振興(七三)	花沢鼎の渡欧と欧州戦乱(七七)
	野口英世の栄冠……………	一八八
	野口英世に恩賜賞(八〇)	再会(九一)
		大隈首相と語る(九九)
第十四章	財団法人設立の英断……………	二〇四
	拡張基金募集開始(一〇四)	募金と同窓の会(一一)
	母校財団法人設立の経過(一二)	母校創立三十周年祝賀会(三四)
		歯科大学創設の叫び(三四)

第十五章	外遊日記……………	一一〇
	日本の本の歯科の光を外つ国に (三三〇)	日本の血腸 (三四四)
	野口英世のガイド (三四四)	一筆啓上 (三三九)
第十六章	試練と栄光と……………	一一五
	震災そして劫火 (三五三)	別邸倒壊 (三五四)
	勲五等瑞宝章 (三六四)	名譽法学博士 (三六五)
	名譽校長となる (三四〇)	廢墟の中から (三五〇)
	内外の救援 (三六一)	
第十七章	医療制度の確立を目指して……………	一二一
	その移り変わり (二七二)	盟友との惜別 (二七三)
	第三次歯科医師法の改正と日本歯科医師会の設立 (二八〇)	日本連合歯科医師会会長となる (二八二)
	歯学の殿堂……………	二九七
第十八章	桃栗三年、博士八年 (二九七)	校旗は燦たり (三〇〇)
	還暦を病床に迎える (三二八)	明日死すとも可なり (三〇五)
第十九章	鎮魂……………	三二二
	野口英世アキラに死す (三三三)	高山紀斎をしのぶ (三三二)
第二十章	激動の時代……………	三三三
	暗雲 (三三三)	第四次法改正とその後の移り変わり (三三四)
	名譽校長となる (三四〇)	緩急のとき (三三七)
第二十一章	夢をかなえて……………	三四三
	わが母校健在なり (三四三)	大学昇格 (三四六)
		永遠の別れ (三五三)